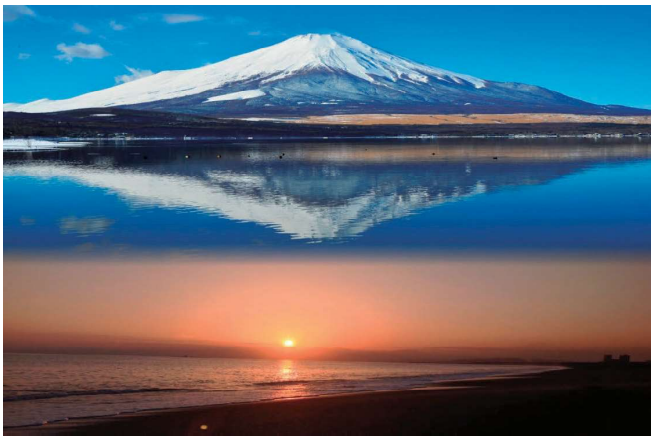
## 3　流域シンポジウム

（報告者：山梨県富士･東部林務環境事務所環境課）

**桂川から相模川へ清く豊かに川は流れる　～森は海の恋人～**



### (1) 趣　旨

富士山に降った雨や雪が 113km の旅をして、太平洋の相模湾へと流れ込む桂川・相模川は、流域のあらゆる生命の源であり、流域住民はその清く豊かな流れに守られ繁栄してきました。しかし、それと共に環境への負荷も増えてきました。

わたしたちの生命と暮らしを根本的に支えているのは、河川を社会的共通基盤とする流域単位の「流域共同体の充実」であると確信しています。

下流域の人々が豊かで安心して暮らすには、源流域や上流域の暮らし方や環境政策が大きく影響します。そして太平洋の水蒸気が雲となり再び富士山に雨を運ぶように、下流の豊かさは上流部へと還流される循環型の仕組みづくり（森里海の循環文明＝富士山モデル）が、求められています。

今回、その一環として「森は海の恋人」を提唱する畠山重篤氏をお招きし、流域のこれからに向けて、皆様と一緒に考え、行動していきたいと、開催しました。

### (2) 概　要

日　時：2015 年 12 月 6 日（日）
　　13:00～17:00
場　所：大月市民会館　参加者：約 200 名
共　催：大月市
後　援：環境省、NHK 甲府放送局、山梨日日新聞、山梨放送、テレビ山梨
協　賛：公立大学法人都留文科大学、
　　大月市立大月短期大学

※　午前中、神奈川からのバスでの参加者が猿橋・桂川ウェルネスパークを見学。

### (3) 内　容

**ア　開会のあいさつ**　　**＜山梨県代表幹事　河西悦子＞**

記念すべき流域協議会第１回のシンポジウムは、20 年前の３月、今日の会場である大月市民会館で行われた。山梨・神奈川両県の事業として環境省（当時は

環境庁)の助成を受け始まり、県境を越えた画期的な取組として、流域市町村・事業者、市民も本気になり、行動計画を作り、一体となって取り組んできた。

20年の経過の中で、神奈川県の水源環境保全税、山梨県の森林環境税の取り組みも始まり、昨年、国において水循環基本法が制定、この7月には、流域基本計画が策定された。環境省では、今日中井様・鳥居様においで頂いているが、『森里川海プロジェクト』として強力に推進が始まっている。掲げた理念、方向性は間違っていなかったと確信。

今回、『森は海の恋人』で有名な畠山重篤様に基調講演をお願いした。富士山の頂上から相模湾まで、流域一体となっての取組、これからに向けて皆様と一緒に考えていきたい。

**イ　開催地あいさつ　　＜大月市長　石井由己雄さま＞**

今回のシンポジウム、桂川・相模川の在り方を考える貴重な機会。日本の象徴である富士山に降った雨や雪が森を潤し、湖に湧き出で、湧水を集め桂川・相模川となり相模湾に注ぐ。

その流域に暮らし合う私達、両県の市民、事業者・行政が、流域の豊かな自然環境をしっかりと守り、桂川・相模川を悠久の物として次の世代につなぐものとして、一体となって活動を推進することは、私達に課せられた使命である。

桂川・相模川流域協議会がますます発展することを期待する。

**ウ　来賓あいさつ　　＜環境省大臣官房審議官　中井徳太郎さま＞**

桂川･相模川流域協議会が20年に渡り地道に活動してきたことに敬意を表する。

地球温暖化、災害が多発している昨今、少子高齢化・人口減少の社会の変化など、どう地球環境を守るか大きく問われている。水の循環、基盤となっている森里川海のつながりの中で、生きとし生きるものは循環系の中に生きている。気候変動が迫る中、混迷しているときだからこそ、原点に立ち戻って、自然を敬い、自然の恵みを引き出し、単に水源を守るという発想を超えて、上流・中流・下流しっかりとつながる仕組みを国民運動としていく。流域、森里川海のつながりの中で、具体的に地域の雇用や産業に結びつくようにターゲットを定めて、其処に皆の思いと、思いとして協力のお金や労力、そういうものが関わる仕組みを草の根・ボトムアップで切り込んでいこうじゃないかと、環境省が先陣を切って取り組んでいる。環境省のプロジェクトとつながる形で6月の源流シンポジウムにも参加させて頂いた。

20年にならんとする流域協議会の取組みは、まさに先行事例であり、森里川海のつながり、流域という発想の中で、何を守り何を引き出すのか、具体的なアクションをみんなで摺り合せ､環境省としても一緒に汗をかかせて頂きたい。

## エ　基調講演

**～森は海の恋人～　　講師　畠山重篤 氏**

**＜講師紹介＞**宮城県気仙沼市唐桑で牡蠣養殖業を営む傍ら、豊かな海を取り戻すために漁民による広葉樹の植林活動「森は海の恋人」運動を続け、子供達の体験学習を続けてきている。現京都大学フィールド科学教育センター社会連携教授。2012 年国連フォレスト・ヒーローズ(森の英雄)など受賞歴多数。著書「森は海の恋人」など多数。

**【講演概要】**

皆さん、こんにちは。ただいま紹介いただきました畠山と申します。海からこんなに遠く離れた山梨で、海も視野に入れたこのような会議が開催されますことは、海で実際働き、生活している立場から、非常に嬉しく思いますし、非常に有意義であると改めて感激しております。また、そういう活動を 20 年以上続けていることに敬意を表します。

私は、東北地方の宮城県の一番端の気仙沼湾で、牡蠣とかホタテ貝の養殖業をしており、うちの親父の代から始まり中学２年の孫が４代目を継げば、100 年続くことになります。一つの家業を 100 年続けることはどんな商売でも大変です。私達のような自然相手の商売は自然がちゃんとしていれば、100 年はおろか未来永劫生活していけると実感しています。

来年の３月で丸５年目となる東日本大震災も経験しました。山梨の方々からも多大なご支援をいただきましたことを改めて感謝申し上げます。

あのような大災害を受け、当初海は瀕死の状態になりました。油が大量に流れ、そこに火がつきました。想定外のことが次々起こり、海が真っ黒になりました。一番心配したのは、生き物が全く姿を消してしまったことです。海が死んだのではないか、生物を育てる力を失ってしまったのではないかと思いました。レイチェル・カーソンが有名な「沈黙の春」を書きました。農薬とか除草剤を大量に使うようになり、春、生き物の声が沢山聞こえる季節になっても、生物が死に絶え、シーンとしている農地を「沈黙の春」と表現をしました。海も文字通り「沈黙の海」になってしまったんです。

私達は、平成元年からいい牡蠣を育てるには、海だけを見ていたのでは駄目で、そこに流れ込む川、その流域の森林が大事ということに気付き、「森は海の恋人」というスローガンを掲げ、気仙沼湾に注ぐ大川という２級河川上流に落葉広葉樹の森作りをしてきました。20 年以上活動を続け、その成果がだんだん見えてきました。

例えば、桂川・相模川は 113km だそうですけれども、東北最大の北上川は倍の 250km、日本で４番目の大河で、秋には鮭が大体５万尾上がってきます。大川はたった 30km の河川ですが、なんと６万尾も上がるようになったんです。20 年以上前は、せいぜい千尾単位だったんです。流域に住んでいる人達の意識がだんだん変わってきたということだと思います。川の水がだんだんきれいになる。そうすると生き物は自分の子孫を残すため、やはりきれいな川に上がる訳です。水産学的には稚魚の放流数に従い鮭が上がるというとらえ方だけをしていますが、単にそういうことではないと思います。川が何本か流れていますが、わが大川が中心となって上がってくるんです。それは、生き物にとって住みよい川になって

きた証拠だと思います。

私達は山に木を植えるのと同時に、流域の人達に「森と川と海は一つだ」と考えてもらわなければ川はきれいにならないと思い、活動２年目の平成２年から流域の学校の子供達を海に呼び、森と川と海のつながりを教える体験学習をスタートさせました。今までに招いた子供達は１万人を超え、その中には、既に博士・ドクターを持った子供も出始めています。

活動の説明の前に、私達の海は宮城県の県境の地であり、川の上流は岩手県になります。ここと同じですね。上流は山梨県で下流は神奈川県です。県を跨ぐって大変ですよね。縦割り行政の壁があります。特に、教育行政は縦割りが厳しいところです。岩手県の学校に宮城県の海に来てもらうのは、問題があると分かりました。まず、岩手県の室根村という6,000 人の村の学校に行き、校長先生に上流の村が、生活の中で海のことを考えるのはどういう時かとお伺いすると、「そうですね、寿司屋に行った時、ちょっと思いますかね。」でした。山梨の皆さんはどうですか。生活の中で相模湾のことはどういう時に考えますか。

そして、教室に行ってみました。海から30㎞しか離れていない、近いですから、海に遊びに連れて行ってもらえる機会があるのではないかと思い、子供達に、１年のうちで海に連れて行ってもらえる機会はどれくらいあったかを聞くと、たった30㎞しか離れていないのに、夏休みに海水浴にたった一回という子供が圧倒的に多いんです。山梨県の人は１年間に子供を何回海に連れていっていますか。海に囲まれている国なのに海は遠い、これは駄目だと思いました。子供達に海に来てもらわなければいけないと、始めたんですが体験学習というものはまるっきり素人ですから、仲間に集まってもらい、手伝ってもらい、いろんなことを考えました。

まず、牡蠣の養殖の体験をしてもらおうと思いました。

牡蠣は夏、だんだん暑くなると産卵し、幼生は２週間ぐらいプランクトン生活をした後、物にくっつく性質があります。ホタテ貝の殻に穴を開け針金を通した、コレクターという牡蠣の種をつける道具を海にドボンと入れると、そこに牡蠣の赤ちゃんが50個ぐらい付くんです。それを、二つよりにしたロープの柔らかいところをほぐして、そこの間に牡蠣の種を挟みます。８ｍのロープに30枚くらいの牡蠣の種を挟む作業を通称「種はさみ」といいます。これなら子供達がロープのよりさえほぐせばできるので、その作業をさせました。農家の子供は、家で手伝っていることもあり、手際よく作業ができます。「上手だね」って褒めます。子供達全員で作業を20本位させ、籠に畳んで入れると、作業船に乗せて筏に連れて行きます。「ロープに挟んだ牡蠣の種を筏につないで下さい。」作業をさせるには筏に乗せなければなりません。海は深く20～30ｍあり背はたちません。子供達は、ぱっ、ぱっと筏に上がるんです。屈強な漁師が付いていますから、大丈夫、海に落ちても怪我はしない。

作業が終わると、必ず子供達から「牡蠣の餌はどうするのか。」という質問があります。何となく魚のように漁師が餌を作り牡蠣にやるというイメージです。山梨の子供達も、やっぱりそういう質問をするでしょう。「餌はどうするのか」その時のショックは未だに鮮明です。そんなこと、今までの漁師人生の中で聞かれたことは一回もなくすごい感動でした。餌となる植物プランクトンは、海でひとりでに繁殖しているので、餌も肥料も一切やらなくて良いと言うと、農家の子供ですから何かきょとんとします。農家は、お米を作ったり、芋を作ったって、いろいろやらなきゃいけない。何もやらないで牡蠣は一人で大きくなるということが不思議なんです。牡蠣やホタテ、植物プランクトンのことがだんだん分かり、太平洋の潮流だけでなく、森林の腐葉土が植物プランクトン、海藻にとって最高の肥料ということが分かって、漁師が「海の恋人」と

言って山に木を植えている話をすると「ふーん」と子供達は納得するわけです。

（子供達が住む）室根村は、富士山の形をした千メートルの室根山を背景としています。気仙沼（湾）の海の近くでは低い山があり、（室根山は）見えませんが、15 分ぐらい舟で行くと低い山の上から室根山が出てきます。自分達が遠足で行っている山を海から見るのは、子供達に取ってはショックですよね。子供達に、「山に生えている木が茂って、葉っぱに雨が降って、腐葉土の水が大川に流れてここまで来ているのだよ。ここに、植物プランクトンがいるのかどうか、ちょっと見せるから。」と、プランクトンネットをドボンと入れ、引き上げ、コップにとれる緑っぽいプランクトン「それを牡蠣が食べているのだよ。」と。さらに「こういうものを食べて牡蠣が育っているのだけど、牡蠣がどう味わっているか君達も試してみない。」、「これを飲まないと、今日は帰れない。」というと、元気な子供達が飲み「キュウリを食べた感じする。」と女の子が言うと、みんな安心して飲むわけです。男の子に「おい君、昨日、大川の土手から立ちションしただろう。」って。「昨日、もしそこに立ちションしたら、それは川から海に流れ込み、最初に体に取り込むのは植物プランクトン、植物プランクトンを君達が飲んだということは、おしっこを飲んだと同じことだよ。」いよいよアイデアが浮かんでくるわけです。

それから筏に戻ってきて、好きなだけ食べろと牡蠣やホタテの貝柱をむいて、子供達に食べさせるわけです。「おいしい」って言うんですね。牡蠣はよくあたるといいますが、我々１万人の子供達を呼んで、そんな事例は１回もないんですよ。それだけ海がきれいだということですかね。

陸（おか）に上がってから、植物プランクトンを顕微鏡で見せます。黒板がないのが残念ですが、すげえ格好をしているんですよ。ものすごく棘があるんですよね。「さっきこれを飲んだということは、お腹に刺さるかもしれない。ここに刺さっているかもしれない。」と言うと子供達は、「きゃー」と大騒ぎです。先生方は、子供達のらんらんとした目を見て「こういう授業ができたらいいなー」と。フィールドに出て、実地しながら学ぶということは、本当にどれだけ頭の中に入っていくのか、先生方も、子供達にとっていい体験だなと言ってくれます。

やがて、先生方が感想文を書かせます。子供達の作文を見ると、字が全然違う。字が躍っているんです。その時の体験が、いかに心に響いたかということです。

「私達は畠山さんの所に体験学習に行って、次の日から朝シャンのシャンプーの量を半分にしました。」女の子はお母さんに「お母さん、そんなに雪のように洗剤を掛けては、結局海に流れていって、食物連鎖で結局、自分に戻って来ますよ。」「早く自然界に分解するような洗剤を使いましょう。」娘がそう言うと、お母さんも心に響くじゃありませんか。お父さんに「ほんの少しでいいから農薬を減らしてください、お願いします。」一事が万事で、体験学習した子供達から、親に伝わっていって、親も「ああ、俺は今まで上流で農業をして、海のことは全く考えたことはない。でも、川の流域の生活は注意しないと、海の生き物や漁師に迷惑がかかる。」そういう話を村会議員にもすると、議会に行くじゃないですか。室根村の人達はいい人達で、素直に受け止めるんです。これからの農業は、環境保全型の農業に切り換えていきましょう。なるべく農薬、除草剤を減らそう。山には雑木林も大事だから、そういう方向にも行こう。

上流の人達の意識が変わり、流域全体にじわじわ浸透していくわけです。すると川があっという間に良くなる。皆さんは、自然環境が取り返しのつかないところに来ているのではないか、そういう危機感があるじゃないですか。これは私の実感ですが、自然は人間がちょっと注意すれば、あっという間に良くなりますから。大丈夫です。結果 30km の川に６

万匹の鮭が上がるようになったんです。

それから、絶滅危惧種といっている鰻ですが、私の若い頃には目の前の海にいっぱいいたんですが、ある時点から、ばったりといなくなった。それは、やはり農薬、除草剤、一般家庭から流す雑排水に含まれる化学物質ですよ。「森は海の恋人」運動を始めて、20 年を超す頃、植樹祭の苗木を持ち寄って、海を見ていると、見たことのある尻尾が石垣の間から出ていたんです。鰻です。流域の環境が良くなった証拠です。海に様々な生き物が戻ってきているんです。よし、これで私も、こういう環境が戻ってきたから、孫に海を渡せると。

悠々自適な生活をしようとしたときに津波が来てしまったんです。目の前の海が真っ黒になって、生き物が全く姿を消した。これで、我が人生終わりだな。本当に、絶望のどん底で、子供や孫達に言い訳できない気持ちでがっかりしていました。５月になり海辺で遊んでいた孫達が、じいちゃん海に魚がいるよというんです。小魚がぱちぱち動いているんです。ああやっと魚が戻ってきた。海の環境の中で、何を見なければならないのか。食物連鎖の出発点、いい植物プランクトンがいるかどうかです。でも、それを見る顕微鏡やプランクトンネットは、全て流されてしまった。京都大学の先生方から、千年に一度の被害がある環境がどういう風に変遷していくか調査に行くという連絡を受け、一日千秋の思いで先生方が来るのを待っていました。プランクトンネットで水をとってもらって、顕微鏡で見てもらった。魚類学の田中政雄先生が「畠山さん大丈夫です。牡蠣が食い切れないほど植物プランクトンがいますよ。」本当にこの言葉は嬉しかったです。食物連鎖の出発点である植物プランクトンさえいれば、この海は未来があるんです。瓦礫の撤去が進み、お盆も過ぎましたら海も澄んできて、筏が浮かべられるような環境が整ってきました。全国からボランティアの方々に来ていただいて、山から木を伐り、筏を作り浮かべ、牡蠣の種を下げるという作業が秋にはできるようになりました。

普通は２年位かけて牡蠣とかホタテが付くんですが、お盆過ぎに種を入れた牡蠣が、翌年の１月過ぎには出荷ができるようになりました。それはどういうことかというと、海の塩水、海ばかり見るのではなく、背景の川の流域の保全を 20 数年掛けてやってきたことが、復活につながっている。「森は海の恋人」文字通り、森と川と海をワンセットで考えることは千年に一度の津波を通しても、実証されたということです。

津波でそういうことも分かったわけですが、その前に分かってきていることがいっぱいあるんです。小田原、相模湾ですね。わたしは海の人間ですから、ちょっと海の話をしますと、小田原は定置網が盛んなところです。昭和 30 年代は日本一ブリが捕れるところだということをご存じですか。

昭和 30 年代、東京の人の贅沢は箱根に冬、ブリを食いに行くことだったそうです。なんと 60 万匹、ブリが捕れていた。定置網で。信じられないでしょ。それが、今では 8,000 匹という話もあり惨憺たる状況です。

小田原の人達は漁師を含めて地域全体が、もう一度ブリを戻すにはどうしたら良いのかとシンポジウムを開き、私は京都大学の先生方とお招きを受けました。定置網を見に舟で行くじゃないですか。意外と、陸地から近いところに漁場があるんですね。反対側を見ますと、ここに丹沢の緑の山塊が目の前に迫ってくるわけです。もちろん、背景に富士山があるわけです。山に木を植えるという体験している人間は、この背景が重要だとよくわかるんです。

私達は、実際に山に木を植えることと子供達に教育することは、ある意味で人の心に木を植える活動でもあるわけです。この両輪がないと良くならない。

そういうことが評価され、朝日新聞の「森

林文化賞」という賞を受けた訳です。受賞により皇居にお招きにあずかるということになりました。両陛下に何をお話しようか。皇后様は「柞（ははそ）」という詞（ことば）がお好きであることが分かりました。皇后様が最も大切にされている和歌は、自分のお母さんを謳った「子に告げぬ悲しみを あらんのを柞（ははそ）かの母　すがやかに老いたまえける」です。

自分を皇后という立場に嫁がせてしまったためにお母さん苦しみ悲しみもあったが、お母さんきれいに年を取りましたね。という歌です。皇后様にそのことをお伝え申し上げたら、最も大切にしている柞という詞（ことば）がでてきたんです。お話に弾みがついて、皇后様も心の中に、「森は海の恋人」という詞（ことば）が浸透したのではないかと思いました。

秋篠宮殿下が生まれる約50年近く前、歌会で「潮」というお題を出されたそうです。皇后様は、土地の漁師の経験に立ってお歌をお読みになった。「春の潮　写す山影　若葉して水のみどりに　魚がよる」相模湾に流れ込む最大の川は相模川であり、その流域全体が自然に近い形にならないと、相模湾の復活はあり得ないということです。

私達の活動が、小中学校の教科書に載りました。去年から高校１年生の英語の教科書にも。英語で「森は海の恋人」をどう表現するのか良い案が浮ばず、皇后様に相談してみました。柞（ははそ）談義が効果を発揮しました。皇后様は「LONG FOR」という熟語を使ったらどうかということでした。「LONG FOR」は、愛しているという意味もありますが、あこがれという意味もあり、少しグレードの高い表現で、お慕い申し上げていますということです。海は森を慕い、森も海を慕う、相思相愛ということです。その間に暮らす人間が、何に価値観を持ってどう生きるかということが問われるということです。

英語の専門家からは、現在進行形ではどうか、「THE SEA IS LONGING FOR THE FOREST」「THE FOREST IS LONGING FOR THE SEA」対の言葉で「森は海の恋人」と定義しました。英語圏の人に披露すると「すごくいい訳だ。」と感心します。

公共事業のあり方も、川の流域中心にシフトし、この関係さえ切れなければ、この国は心配のないということが見えてきたんです。環境省がいち早く見出し、新しいプロジェクトを行うとしています。国民全体として、応援していかなければいけないと思うわけです。いろんな意味で山梨は、東京にも近いですし、武田信玄の国でもありますし、歴史的に影響のある国ですから、山梨県民がこのことに興味を持って、まず手始めに相模川の流域の環境を良くして、みんなでブリの刺身を腹一杯食う時代を迎えようではないですか。

### オ　第１分科会　「次世代につなぐ若者たちの活動」流域での実践活動と今後の連携

**コーディネーター**　　**金山光一（都留文科大学特任教授）**
**サブコーディネーター**　**原田　公（麻布大学講師）**
**（発表者）**

■　**宮本秀一：大月市立短期大学・大月森づくり会**

短大生が地域実習の授業の一環として、大月森づくり会の活動に参加している。「人と水の関係」~今までとこれから~と題して、山梨県の水資源活用の現状・林業の人不足等の課題と、今後の持続可能な社会の構築について発表した。

■　神阿部祥子・菊池香帆：都留文科大学・サークル「和み菜家」

富士山の恵みの湧水を活用した、都留市の地域限定・季節限定の貴重な特産物「水掛け菜」栽培のサークル。活動を通して感じた地元住民の環境保全意識の低さ・栽培者の減少等の実態と課題・今後のあり方を報告した。きれいな水に恵まれている地元(上流)の人は、汚してもすぐきれいな水が流れてくるのが当たり前で、その有難さを考えない。人と人がつながって、きれいにして下の方につなげていけたらいいなと考えました。

■　岸本和純：神奈川県立横浜星陵総合高等学校

「川の生き物たちとの出会い」と題し、相模川での遊びを通して水中生物を知った感動、人との関わり方を知る機会になった、実体験による心と体のリフレッシュにもなったこと等多くの学びを得た報告。成長過程で子供が気軽に遊べる場所の必要性も述べた。

■　釜谷優太：麻布大学・フォレストノバ

麻布大学他数大学で構成する学生団体の活動。毎月２回相模湖周辺で「森を知る」「森をつくる」「森をつなぐ」を軸に、森林整備活動と環境教育を実施。相模原市内でのイベント出店・啓発活動の報告があった。

□（ゲスト）鳥居敏男 環境省自然環境局自然環境計画課課長

今回、若い人たちがこんなに水を守ろう・森を守ろうと活動し、このように集まっていることに驚いている。「森里川海プロジェクト」も環境省だけではできない。色々な人がつながってのこのような動きは心強い。

◇　「活動の原点が【源流は相模湖である事】にある」との報告に、質問者から相模川の源流は相模湖ではなく、桂川であることの指摘が有った。

◇　若者達の活動への感動と今後へのつながりの課題・期待のアンケートが多かった。

カ　第２分科会　「つなげよう、支えよう」～私たちの税金の使い方を知ろう～

コーディネーター　　塙　武郎（大月市立大月短期大学准教授）

（発表者）

■　山梨県環境森林税：藤原さつき（山梨県森林環境部政策企画監）

県土の 77.8%を占める森林保全は水源保全の大きな要である。荒廃森林再生事業には、多額の経費と手間がかかる。荒廃が進んでいる民有林の再生に力を入れた山梨県の森林環境税を基盤とした再生事業の現状報告及び下流域との協働事業の成果・重要性の報告。

■　神奈川県水源環境保全税：早川清美（神奈川県水源環境保全課）

神奈川の森と水を支える財源として、県民一人当たり年額約 890 円を負担いただき、水源環境を保全･再生する様々な取組を進めていることの説明。現在２期目(平成 24 年度から 28 年度までの５年間)で、税収規模は年額約 39 億円。施策に県民の意見を反映するため県民会議を設置している。

■　国の取組み：中井徳太郎（環境省大臣官房審議官）

国が進める「つなげよう　支えよう森里川海プロジェクト」に関する税構想について詳しく語られた。

□　財源があっての水循環の流域保全活動であることを国がきちんと保証し、使い勝手の良い財源支援体制を期待したい。

□　アンケートから：両県の環境税・使い道の説明での理解と、新たに水資源保全の課題と重要性を実感したとの声が多かった。

**キ　第３分科会　流域での交流・ふれあい**
**～事例から新たな活動～**
**豊かな自然環境を育てていくために、**
**私たちができること**

**コーディネーター**
**峯谷一好（桂川・相模川流域協議会）**
**中門吉松（桂川・相模川流域協議会）**

**(ｱ) 山麓探偵団　　石川慶一郎**

富士山麓の自然を知ろうと開始。

240 回を越す活動は、山麓の森や山に入り動植物とふれあい観察しながら富士山麓の自然を再発見する。

初夏は中腹でのビバークや奥丹沢源流で野営を行い自然の営みと共振、極寒の２月には、雪の丘に登り青空レストランを設営し食を楽しみながら雪遊びに興じる。自然の奥深さや生き物の不思議さから自然への認識と身体反応の変化を実感している。

**(ｲ) 忍野ユネスコ協会　長田五月**

平成８年発足、地域住民を中心とする会員によって、環境活動・未来遺産活動・青少年活動・世界寺子屋運動などを軸に活動を進めている。

７月「AQUA SOCIAL fess!!」、10 月「チームエナセーブ未来プロジェクト」を桂川クリーンキャンペーンと位置付けて活動展開している。

県内、神奈川・東京・長野など広範囲から毎回 100 名ほどが参加する。

**(ｳ) 相模川湘南地域協議会　中門吉松**

a　カワラノギクは、絶滅が心配されている絶滅危惧種で相模川、多摩川、鬼怒川でしか生育していない。

中流では、相模原市立湘南小学校が環境教育として、さがみ地域協議会が神沢河原や六倉河原で、種まき・雑草取りなどの保全活動を行う。下流の神川橋下河原では、繁茂したシナダレスズメガヤの除去、カワラノギク保全・再生活動をしている。

b　水ガキ養成講座

川に親しむことは川の自然生態系を体験・理解し、川で遊ぶことは生物の生態を知ることにつながります。川の面白さを知る機会として親子のカヌー、魚取り体験などを実施した。

(エ) 馬入水辺の楽校　臼井勝之

ゴミ捨て場だったところの自然環境を復元して15年経過した。馬入水辺の自然環境は元気になったが、子供達の遊び声が聞こえてこない。都市の住民や子供達たちの自然離れが進み若いボランティアが集まってこない。何とかせねばと「スマホを捨てて野に出よう」キャンペーンを展開しようと思っている。

一緒に力を合わせませんか！

(オ) ゲスト畠山さんのコメント

「『良い子は川で遊ばない』という標識が河原に立ててある。川で遊ぶ事が否定されている」との現状は、報告者からも有り「学校の否定的態度・地域、保護者のとらえ方も同様なので活動団体が全てを担う形になってきている」との課題も語られた。

ク　アトラクション

［薪と音と追分人形のコラボレーション］

石黒一夫（企画構成演出）、

笹子追分人形保存会、BAN（演奏）

山に囲まれた大月市の、山に捨て置かれた間伐材などを薪にして、舞台に積み上げ、竹で作った照明が飾られた舞台。今回、間伐材の薪は地元「ギャラリー民」の協力により調達、「森づくりの授業」を受けている大月短期大学の学生達により、積み上げ、片付けが行われた。薪を積み上げた舞台は、畠山さんの基調講演にもぴったりの雰囲気でした。シンポジウムの最後、石黒氏演出により、薪と竹で構成された空間で、地元で育まれた伝統芸能「笹子追分人形」と大月市在住のミュージシャンBANとのコラボレーションが演じられた。幻想的で斬新な舞台は、基調講演・分科会に余韻を残して終わることができた。

ケ　閉会あいさつ　＜神奈川県代表幹事　倉橋真知子＞

今日は、神奈川から２台のバスで参加した。中には何人かの小学生が、今回の講演者の畠山さんが教科書に載っているということで、親子で参加している。今日のことはきっと印象に残ることと思う。今回、高校生や学生達若者が多く参加してくれている。これから若い人達が活躍してくれることを期待している。最後の舞台は、緊張した話の後で、ゆったりとした有限な世界を感じさせてくれた。

コ　パネル展示

今回、会場のロビーで多くの関係者に御協力頂き、パネル展示した。普段あまり顔を合わせる機会の少ない事業者会員にも多く参加していただき、それぞれのブースで説明頂いたり意見交換もでき、ストーブや木工製品、人形など実物を手に取ったり触れることもでき、大変充実した展示を行うことができた。

【会員】　○横浜市水道局　○(株)いであ　○東京電力山梨総支社
○北都留森林組合　○富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護林組合
○Pal－System 西桂センター○かながわ海岸美化財団
【協力】　○やまなし森の紙推進機構　○甲斐東部材産地形成事業協同組合
○やまなし木質バイオマス協議会　○笹子追分人形保存会
【主催】　○桂川源流地域協議会・桂川東部地域協議会　○湘南地域協議会
【共催】　○大月市

＜アンケート＞
多くの方々の率直な感想頂きましたが、その一部を掲載します。
○　「相模川は自然の流れにしないと相模湾は良くならない」この言葉が強く印象に残った。「流域全体で考えてほしい!!」このことばも!!「心の中に木（気）を入れる」!!（60 代男性）
○　畠山さんの講演を楽しみに参加しました。畠山さんの存在を知ったのは、東日本大震災でした。気仙沼の森と海を守る畠山さんの「山と川・海は三位一体」という考えに衝撃を受けた事を今でも鮮明に覚えています。森の栄養が川・海に影響していることを知り、今まで余り興味が無かった環境保全等に興味が出てきました。今後も環境について知り、廻りに伝えていきたいと思います。（30 代女性）
○　高校生から大学生まで若者が、水源等について興味をもっていろいろな取り組みをしていることを知り、私自身も興味を持ちました。「今後彼等のような若者を増やして行くにはどのようなことをすればよいのか、考えていくことが必要になってくるのではないか」とさらに感じました。（20 代男性）
○　会場に入りきれないほどの参加者に驚きました。目的税は理解できました。複数県に渡る税の使い道には有効と思いました。（40 代女性）

## まとめ

今、桂川・相模川流域協議会がやってきたことを、国が大きく進ませようとしている時に来ています。環境省の「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト」、水循環基本法に基づく内閣府の提唱する「流域の総合的かつ一体的管理」とは、まさに当流域協議会の活動そのものです。

今回のシンポジウムでは、若い人達が流域の中で生き生きと活躍していることも見えました。環境税、どのように使われるのか、多くの人達の関心があることもはっきりしました。環境の実践活動には、上流から下流までたくさんの人達が参加してきています。

20 年を経過しての流域協議会、若者達にもつなげていき、より多くの皆様に一緒に流域の活動に参加して頂きたい。行政の枠を超え、利害関係を越えて、更に地域の活性化にもつながるよう、流域ガバメント・流域マネージメントに、一緒に取り組んで頂きたいと願っています。

## ＜桂川･相模川流域協議会　流域シンポジウムの開催状況＞

| | 日　時 | テーマ | 会　場 |
|---|---|---|---|
| 第 1 回 | （1996）<br>H8.3.16 | 桂川･相模川流域の交流と連携の序章 | （大月市）<br>大月市民会館 |
| 第 2 回 | （1996）<br>H8.11.23 | 上流域からの発信 | （富士吉田市）<br>富士五湖文化センター |
| 第 3 回 | （1998）<br>H10.2.14 | 流域環境保全プログラムの発信 | （海老名市）<br>海老名市文化会館 |
| 第 4 回 | （1999）<br>H11.3.7 | 桂川･相模川を美しくするために<br>～流域のゴミ問題～ | （相模原市）<br>相模原市けやき会館 |
| 第 5 回 | （2000）<br>H12.3.5 | 桂川･相模川の水をきれいにするために<br>～石けんと合成洗剤を例として～ | （都留市）<br>都留市文化会館 |
| 第 6 回 | （2000）<br>H12.11.3 | 清く豊かに川は流れる<br>～飲み水から桂川･相模川流域を考える～ | （寒川町）<br>寒川町民センター |
| 第 7 回 | （2001）<br>H13.11.18 | 相模湖を知ろう･遊ぼう･体験しよう | （旧津久井郡相模湖町）<br>相模湖交流センター |
| 第 8 回 | （2002）<br>H14.12.8 | 森･川･海との新たな交流･連携<br>～市民参加による流域の森づくりと上下流交流の促進～ | （大月市）<br>大月市民会館 |
| 第 9 回 | （2003）<br>H15.11.8 | 蛇口の向こうの森を考えよう<br>～飲み水はどこからどこへ～ | （横浜市）<br>横浜市情報文化センター |
| 第 10 回 | （2004）<br>H16.11.27 | 豊かな水の恵みを後世に<br>～富士から始まる循環型社会～ | （富士吉田市）山梨県郡内<br>地域産業振興センター |
| 第 11 回 | （2005）<br>H17.11.5 | 桂川･相模川の未来を創ろう | （相模原市）<br>サン･エールさがみはら |
| 第 12 回 | （2006）<br>H18.11.12 | ―桂川･相模川水系― 水源地からの警告<br>～誰が私たちの飲み水を守るのか～ | （上野原市）<br>上野原文化ホール |
| 第 13 回 | （2007）<br>H19.11.23 | 桂川･相模川からのメッセージ<br>～水質と農薬のかかわり～ | （愛川町）<br>愛川町文化会館 |
| 第 14 回 | （2008）<br>H20.11.8 | 変わりゆく富士山<br>～桂川･相模川の源～ | （富士河口湖町）<br>勝山ふれあいセンター |
| 第 15 回 | （2009）<br>H21.11.21 | 都会が支える水源林の未来<br>～流域材の活用～ | （横浜市）<br>神奈川中小企業センター |
| 第 16 回 | （2010）<br>H22.9.25<br>～26 | 『川は誰のものか』 | （厚木市）<br>相模川三川合流地点 |
| 第 17 回 | （2011）<br>H23.11.5 | いのちをつなごう<br>～最上流部で暮らすいきものたち～ | （忍野村）<br>忍野村生涯学習センター |
| 第 18 回 | （2012）<br>H24.11.24 | 川の声を聞こうよ　桂川～相模川 | （相模原市）<br>相模女子大学 |
| 第 19 回 | （2013）<br>H25.10.26 | 富士山から相模湾へ水は巡る<br>～紅葉の山中湖シンポジウム～ | （山中湖村）<br>山中湖村公民館 |
| 第 20 回 | （2014）<br>H26.12.7 | 夢枕獏さんの面白い川の話と<br>川の自然の楽しみ方 | （寒川町）<br>寒川町民センター |
| 第 21 回 | （2015）<br>H27.12.6 | 桂川から相模川へ　清く豊かに川は流れる<br>～森は海の恋人～ | （大月市）<br>大月市民会館 |